

2025年1月1日

中東関係者各位

九門康之

## 「中東なう」2025年1月新年

### 1. 2025年の中東

2021年以来、中東諸国間の「融和」の流れは2025年も継続すると思われる。米国が主導的立場をとらなくなっていることが一つの要因である。中東の指導者達は、米国ありきで組み立てていた地域外交を、米国がないという前提で組みなおしてきた。そこには、これを機に自国の利益拡大をはかろうという積極的な姿勢と、近隣諸国との関係を改善することで、自国の立場を守りたいという受け身の姿勢が混在する。

中東での「融和」を遠因とする状況の変化がおきている。それまではあり得なかったことが、あたりまえのように進展する。シリアの政権崩壊もその一つだ。

シリアは、イランからレバノンへの物流中継国になるとともに、国内安全保障でヒズボラの支援を受けていた。そのヒズボラは、2023年秋のハマス・イスラエル衝突でハマスを支援したためイスラエルの執拗な攻撃を受け指導者も失った。2023年春、イランとサウジアラビアの外交関係が正常化し、イランの同盟国シリアはアラブ連盟に復帰した。外交で一息ついたアサド大統領は油断したのだろうか。想定を超えるイスラエルのヒズボラ攻撃で、国内治安をささえる柱だったヒズボラは弱体化し、アサド政権はあっけなく崩壊した。

中東では事案が突然表面化する。理由は、情報が国外に十分伝わりにくいことと、物事がトップダウンで決まるためである。動きを予想することはむづかしい。しかし、事後的に動きを検証すると、後付けながら予兆があったことが判る。シリアの例では、アサド大統領が2024年春以降目立った発言をしなかったことである。ヒズボラが攻撃されても沈黙し、イランからコメントを求められる局面もあった。筆者は、アサド大統領が次の一手を考えているのかと推測したが、実際は支配体制が痛んでいたのだった。2025年も想定外の出来事があるかもしれない。継続した情報収集は重要だ。

### 2. シリア政権交代の影響～明るい想定外を期待したい

アサド後のシリアを次の2つの視点で考える。一つは、クルド問題である。トルコのエルドアン大統領は「クルド問題は近く終了する」という謎めいた発言をしている。限定的ではあるが、融和姿勢の一環としてクルド系の人民平等民主党（DEM）に投獄中のオジャラン氏との面会を許可した。シリア国内では、シリア・クルド民主統一党（PYD）が新シリア軍への合流の意志を示したと報道された。これらの動きは、将来トルコ・シリアのクルド問題が下火になる可能性を示唆している。

もう一つの動きは、サウジアラビアのシリアに対する姿勢である。シリアの実質的な指導者であるシャアラ氏は、シリア復興でのサウジアラビアの役割に強い期待を抱いている。実現すれば大きなインパクトがある。現状、シリアを支える産油国としてカタールが挙げられている。ロイターなどの報道によれば、カタールはシリアへの投資に意欲を示している。

シリアをはさんで南北で勢力争いをしてきたトルコとサウジアラビアの方向がシリア支援で一致すれば、中東全体の融和が進み、地域安定と経済活動の活性化が進む可能性がある。2025年が明るい年になることを期待したい。

### 3. カタールが財政赤字に転落～産油国の資金調達拡大へ

コロナ禍以降、サウジアラビアなどによる「カタールボイコット」解除もあり、カタール財政は好調だった。2024年は黒字幅は縮小したものの財政黒字を維持したが、2025年度予算では2020年以来初めての赤字予算となった。理由は、エネルギー収入を低めに見積もったことと、緊縮財政を一部緩和したためである。2025年の原油市場価格は1バレルあたり60ドルを想定している。財政赤字は、金融市場からの資金調達で賄う。現状、カタールの格付けはAa2で信用力に懸念は無く、資金調達は順調に進むものと思われる。他の湾岸産油国も事情は同じであり、2025年は、カタールのみならず中東政府による資金調達が増加するものと思われる。

### 4. その他のニュース

●サウジアラビア、2034年サッカー・ワールドカップのホスト国に●サウジアラビア、PIFがヒスロー空港株式15%を取得●エジプト、韓国社がエジプトで鉄道車輛を製造●サウジアラビア、リヤドメトロが営業開始●南スーダン、預金引き出し規制を解除●UAE、香港金融庁と資本市場育成で協力●ドバイ、災害対策庁を設置（洪水被害対策で）●シリア、先行きを懸念する少数民族●エジプト・アブダビ、ベイルート便を再開●ガザ、シリア、イラク、ドバイ、各地でクリスマス行事報道●

以 上